

葬送の装いからみる文化比較

The Comparative Cultural Study of Funeral Clothing

増田 美子*¹⁺, 大枝 近子*²⁺, 梅谷 知世*³⁺, 杉本 浄*⁴⁺, 内村 理奈*⁵⁺
Yoshiko Masuda*¹⁺, Chikako Ooeda*²⁺, Tomoyo Umetani*³⁺, Kiyoshi Sugimoto*⁴⁺
Rina Uchimura*⁵⁺

*1 学習院女子大学 国際文化交流学部 東京都新宿区戸山 3-20-1

Faculty of Intercultural Studies, Gakushuin Women's College

3-20-1 Toyama, Shinjuku-ku, Tokyo, Japan

*2 目白大学 社会学部

Faculty of Social Science, Mejiro University

*3 学習院女子大学 国際文化交流学部 非常勤講師

Part-time Lecturer, Faculty of Intercultural Studies, Gakushuin Women's College

*4 東海大学 文学部

School of Letters, Tokai University

*5 跡見学園女子大学 マネジメント学部

Faculty of Management, Atomi University

* 服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化学園大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Gakuen University

Abstract : This thesis is about the look in the funeral ceremony in Japan, China, India, Islam and Europe all part area. As the result, that white is the color which concerns a funeral ceremony deeply in which area did it become clear. For white in a Japanese funeral ceremony, a Shinto ritual and a funeral fact are telling the ancient tradition of same root. White was god-like and the spiritual color. White of burial clothes and a mourning dress in China is the color of the root of a matter and also is the color to which the end everything is sent. White in India means purity and cleanliness. White in Islam is the color Allah likes most, symbolizing heaven which beams. White in Catholic shows a hope of a rebirth. Thus the white meaning in the funeral ceremony seems different depending on countries and religions. But the common point we think white is the color with the light in the area besides India.

要旨: 日本・中国・インド・トルコ・フランスの各国での葬礼における装いを調査した結果、いずれの地域においても白が葬礼と深く関わる色であることが明確になった。日本の葬礼の白は、神事と葬事が同根であった古代の伝統を伝えたものであって、白は神霊な色であり、中国の死装束や喪服の白は、物の根源の色であり、物事の最後を送る色であった。インドの葬礼と関わる白は浄性や清潔を意味したもので、イスラ

*1) yoshiko.masuda@gakushuin.ac.jp

ームの死装束の白はアッラーが最も好む色であり光り輝く天国を象徴している。カソリック教における白は復活の希望を表す色である。このように一見国や宗教により葬礼における白の意味は異なるようにみえるが、実はインド以外の地域では白は光と関わりがある色との共通点がみられる。

配当決定額

平成 21 年度	1,500,000 円
平成 22 年度	1,050,000 円
平成 23 年度	1,000,000 円
合計	3,550,000 円

研究の目的

最も保守的な儀礼の一つとして、それぞれの国の伝統文化を今日に伝えている可能性が高い葬送儀礼を研究対象として、日本・中国・インド・トルコ・フランスの服飾及び文化の研究者が協力し、葬礼における装い(死装束・喪服等)に焦点を当て、仏教文化圏・儒教文化圏・ヒンドゥー教文化圏・イスラーム教文化圏・キリスト教文化圏における文化比較を試み、それぞれの文化圏での特徴および各文化圏における共通点・相違点を明らかにすることを目的としたものである。本研究によって、各文化圏における人と死との関わりを、装いという具体的な姿を通して時間的経過も含めて浮き彫りにし、相互に比較検討することによって、相違点と共通点を明らかにすることができれば、宗教問題その他で対立している人間同士の相互理解を深めることに役立つ資料を提供できるのではないかと考えている。

研究の方法

5 人の共同研究者がそれぞれのフィールドである日本・中国・インド・トルコ・フランスを対象として、これらの国や地域における葬礼の実態と装いについて文献及び実地調査を行い、その結果を持ち寄って討論を重ねた。これらの過程の中で、それぞれの国における葬礼とその装いの具体的な姿が明らかになるとともに、いずれの地域においても白が深く葬礼と関わっている可能性がみえてきた。従って、この共通点である葬礼と白との関わりに焦点を当てて、本研究を進めることとした。

研究の実施計画

21 年度は各自がそれぞれの担当国で実地調査による聞き取り調査をするとともに、文献資料収集に専念し、その結果を持ち寄って報告・討論を行うこととした。梅谷は日本の近現代における葬礼に関する資料収集に努め、増田は中国に伝わる伝統葬礼の調査および文献収集をする。杉本はインド東部オリッサ州の旧都カタックに赴き、ヒンドゥー教徒の葬送儀礼とその装いの調査・資料収集に当たる。大枝は近現代のイスラームにおける資料収集に努め、内村はフランスにおける葬送儀礼関係の書籍その他の資料収集を行うこととした。

22 年度は、引き続き担当地域の実地調査や資料収集及び収集した文献の読み込みを行うこととした。梅谷は近現代日本で庶民層に喪服の黒が浸透していく過程および喪の色としての黒に対する人々の意識について、新聞・雑誌の記事を中心に調査し、増田は収集した中国の伝統的葬送儀礼に関する文献を読み込み、現在まで伝わる葬礼の歴史を明らかにする。杉本は調査に行ったカタックでのヒンドゥー教

徒の葬礼に関する文献を読み込み、体系化するとともに葬送儀礼に関しての聞き取り調査を継続して行う。大枝はイスラーム教徒が 99%を占めるトルコを中心に、死生観及び葬送儀礼についての資料収集に努める。内村は収集した AFP 通信データベース資料、及びフランス国立博物館で収集した法令や作法の資料の分析とともに、再びパリに赴く。

23 年度は、各研究者は担当地域の調査資料の不足分を補うとともにそれらを分析して、それぞれの地域における喪と白色の関わりの実態をより明確にし、その関わりの意味を明らかにすることとした。梅谷は江戸時代の葬礼に関する資料収集にも努め、近世から近代へと受け継がれた葬礼に見られる白喪服の意味を明らかにする。増田は近現代中国の葬礼関係の文献を引き続き読むとともに、古代中国の喪礼と白喪服の意味を探るために古代中国の葬礼関係の資料を渉猟する。杉本は当該地域の儀礼の特徴をより広範な文脈中で再考するとともに、従来の調査をもとに遺体と白布のかかわり及び白色の意味について明らかにする。大枝はトルコにおける葬礼について現地に赴いて資料収集を行い、イスラーム教徒の死生観及び葬送儀礼と服飾及び遺体を包む白布の意味について明らかにする。内村は収集したフランスを中心とするヨーロッパ文化圏の喪服に関する資料の整理と分析を進め、カソリック教における喪の基本色である白色の意味を探る。23 年度は最終年でもあり、各自の研究成果を持ち寄って各地域の葬送と装いに関する文化の比較検討を行うとともに、その中における葬礼と白色の関わりを普遍的な意味、地域による差異等を明らかにすべく努め、最終報告書に纏める。

研究の成果

【研究経過】

21 年度は 5 人の研究者が各自、研究対象としている地域における近現代の葬送儀礼の実態を把握することに努めた結果、仏教文化圏の日本、仏教・儒教・道教の混在した中国、インドのヒンドゥー教文化圏及びヨーロッパのカソリック教文化圏においては、いずれも死と関わる基本的な色は白であることが明らかとなった。22 年度は、21 年度の成果を踏まえて、主として葬礼と白との関わりに焦点を当てながら、各担当地域を調査した。その結果、葬礼と白との関わり方には、インド・トルコのように遺体と関わった形の地域と日本・中国のように喪と関わるものは基本的に白という地域、カソリック文化圏のように白が儀礼の基本色となっている地域というように地域差が見られた。23 年度は、この白との関わり方の地域差に着目して研究を進め、各担当地域における白の意味を明らかにし、その上で葬礼における白の意味を考究するとともに文化比較を行った結果、下記の成果が得られた。

【研究成果】

1. 各国・各地域における葬礼の装いと白

(1) 日本

日本における葬礼の装いの色は古くから白を基本とした。古代日本人は白を神霊な色とし、人が亡くなると神になると考えたことから、葬礼に関わる色を白としたのである。平安時代には支配者層に黒系統の喪服が広まり、宮中ではその伝統が近代まで続いたが、武家や公家の喪服は室町時代には再び白が中心となり、江戸時代まで庶民層を含めて喪の色は白が基本であった。

近代化が進められた明治以降は、大正、昭和と長い時間をかけて、葬礼における装いの色は白から黒へと変わっていく。明治中期の都市部の葬礼では、男性は、喪主であっても羽織袴やフロックコートなどの礼服着用が一般的で、白の着用は、上流層の葬礼で喪主が着用する素服に限られた。女性には、故人の妻や娘をはじめとする近親者に白喪服が継承された。明治40年前後になると、男性は洋装全体を

黒として左腕に黒喪章を巻くことが多くなり、女性は一般会葬者を中心に紋付黒無地の着物に黒帯という装いが見られるようになる。

このような黒喪服の浸透を促したのは、軍人の葬儀や国葬・大喪における黒の導入であった。1879年の陸・海軍会葬式公布以降、軍人の葬儀には軍服に黒喪章をつけ、軍旗や楽器を黒布で覆うこととされ、日清・日露戦争時には戦没軍人の葬儀を通して黒という喪の色が全国の庶民に広く知られた。国葬・大喪における会葬者の服装については、政府は大礼服や通常礼服に黒喪章をつけることを定め、女性の洋装は黒無地とした。大喪では一般国民にも黒喪章着装を指示した。これらの黒の導入は西洋にならったもので、黒という西洋の喪の色はまず公的な葬礼に採用されたのである。1897年の英照皇太后大喪では国民の多くが黒喪章をつけ、明治天皇大喪では黒喪服を整える者も少なくなかった。一方英照皇太后大喪以後の国葬・大喪では、儀式を司る役人や柩の供奉人が黒装束を着用し、宮中の伝統的な喪の色も黒であることが広く一般庶民に認識された。このことは黒を日本人の喪の色と位置づける上で重要であったと推察される。

黒という喪の色が浸透する一方で、昭和前期まで上流層の喪主による素服の着用は続き、故人の妻や娘の喪服は白無垢・白帯姿が正式とされた。ただし大正後期からは、上流層を中心に故人の妻や娘が黒喪服を着用する例もみられるようになる。このことは、大正時代に入って葬儀の告別式化がすすみ喪服の礼服としての側面が重視されるようになったためと考えられる。

以上のように、明治以降の日本においては、新しい時代にふさわしい葬礼の装いが模索される中、黒喪服の着用が次第に広がっていった。戦没軍人の葬儀や国葬・大喪を通して黒が新しい喪の色であることを認識した近代の人々は、黒喪章や黒喪服に、天皇を中心とする国家の権威と西洋文明とを重ね合わせていたと考えられる。しかしそのような流れの中にあっても、白喪服が正式であるという規範が揺らぐことはなかった。近代化の波が激しく押し寄せた都市部においても、白喪服の伝統は厳として守られ続けたのである。

(2) 中国

古代中国においては息を引き取ると、頭は白練絹で包み耳は白綿でふさぎ顔は白布で覆い、潔白な布製の明衣を着せる。この上に親戚等から贈られた衣裳三重ねを左衽に着せ、死後2日目には19重ねの衣裳を逆様に着せかけてくるむ。更に3日目の朝に30重ねの衣裳でくるみ、棺に納める。葬送の日には白布で柩車を飾る。一方、喪主は死後2日目に頭髪を白麻布で括り、腰に麻縄の帯をつける。喪服には五服の制が成立している。第一等斬衰(父親・夫等への3年の服喪)の衣服は生成りの粗麻布製で端は縫わない。第二等齊衰(祖父母・兄弟・母への1年の服喪)の衣服も生成りの粗麻布製であるが端を縫う。第三等大功(従父兄弟への9ヶ月の服喪)は白の粗麻布製衣服。第四等小功(5ヶ月の服喪)は目の細かい白麻布製。第五等總麻(3ヶ月の服喪)は裳のみを目の細かい白麻布製とするというものである。

近代中国においては、予め死後の衣服(寿衣又は老衣)や装飾品を作っておくのが一般的な習慣であった。寿衣は9領・7領・5領・3領等の重ね着がなされるが、その枚数はいずれの地域でも奇数と決まっている。色は白もあるが地域により異なる。死が確定すると用意しておいた寿衣を着せ、顔や身体に白い布を被せる。葬式は「白事」と言われるように屋敷全体が白に装束され、喪服には古代からの五服の制が生きている。地域により差はあるが、男子は孝巾(半幅の白布を頭に巻き、覆い、後ろから前に倒す)をかぶり、女子は一幅の白布を折り畳んで頭を覆う。男女とも袖口や裾を裁ちっぱなしのままにした白布の衫を着ることが多い。吉林省の方では、埋葬した後は2年間、白衣・白領・白帯・白冠・白鞋の姿で喪に服した。しかし現在は火葬が普及し、都会では地味な服に黒喪章をつけるパターンが多くなっている。

以上のように、中国では古代の葬制の基本的部分は現代まで連綿と受け継がれてきており、葬礼も死装束も喪服も白を基調としている。なぜ古代中国においては人の死と関わる色を白としたのであろうか。『礼記』効特性編に、蜡祭(12月に万物の霊を饗応する祭)には天子は白皮帽子に白絹衣服で祭を行うが、白衣服は喪服でもあり、物の終末を送るのに相応しいものであるからとの記述がみられる。『礼記』檀弓編下には「埋葬時には、神と関わるために吉服である弁冠に変える。しかしその際は特に白絹の弁冠を用いる」と記されている。即ち、喪服は神と関われない衣なのである。しかしここで白絹を用いているのは、白が物の終末を送るのに相応しい色だからであろう。『礼記』礼器編には、白は色の根源であるとみえる。白が全ての色(物)の根源であれば人も死ぬと白に帰るのであって、それを送る装いも白というのうなずける。白川静氏は白をシヤレコウベとしている。確かに人の肉体に宿る「魄」は白い鬼(靈魂)である。

(3) インド

これまでの研究史が明らかにしているように、ヒンドゥー教の葬送儀礼は一樣ではなく、地域差・階層差・ジェンダー差があり、葬儀の典範書によってもその差異が見られる。オリッサ州カタック市ラニハット地区にあるラーダーモハン寺院での聞き取り調査においては、死の直前の儀礼(*Chandrayana*)より葬送がはじまり、死後直ちに行われる火葬儀礼を経て、さらに11日間に亘って様々な儀礼が遺族を中心に執り行われると説明された。

この間、遺族は死の穢れによって危険な状態にあるため、それを回避するための儀礼が行われる一方で、死者に対しても儀礼が執り行われる。理念的には亡骸を離れて不安定な状態にある靈魂が、安定した祖霊へと転化し、南方にあるとされるヤマ王が住まう死者の国へ無事旅立つことができるよう準備をするのである。祖霊を形成するため、毎日「ピンダ」という飯団子が供せられ、南方に向けて胡麻を混ぜた少量の水が献げられる。この間親族には、僧侶によって『ヤマ・プラーナ』の一説が唱えられる。また川岸に小さな死者の家を建て、そこに祭壇を設けて儀礼を行う。この他火葬後4日目に拾骨式(*Asthi Sanchayana*)があり、遺骨を最寄りの聖なる川へ流す。

夜明けとともににはじまる10日目の儀礼の後に、遺族は沐浴をし、儀礼場を片付けて浄め、新しい服に着替える。翌11日目に飯団子の最後のピンダが献げられ、その場に死者を招いて、旅立ちに必要なとされる品々を供える。死者の来世を砂に現れた動物の形によって占うこともある。

こうした一連の儀礼は遺族を中心に執り行われるが、儀礼に際しては白を基調とするドーティーやサリーを着ることが一般的である。また、死者は白い布に覆われて茶毘に付される。例外的に夫よりも先に死去した妻については、吉兆の色である赤のサリーを身につけ、髪分け目にはシンドゥール(辰砂)が塗られ、腕輪がはめられる。これは妻としての責務を全うしたことを祝福する意味がある。逆に夫が先に亡くなった場合、寡婦であることを示すために、妻は白いサリーを着続ける。ヒンドゥー教においても、白は浄性や清潔さを意味し、喪の色としても広く用いられるのである。現在、カタックやその周辺では、11日目の夜に故人を知る数多くの人々が招かれ、食事が振る舞われることが多い。招待客は入り口付近でまず白い服装の喪主と語りあってから中に入り、祭壇に手を合わせる。招待客に決まった喪服はなく、多くの場合普段着である。つまりこの催しは葬儀の一部ではなく、一連の葬礼が無事終了したことを明らかにするものであり、これによって遺族は一時的に断っていた社会的繋がりを回復させるのである。

(4) トルコを中心としたイスラーム

イスラームでは一生に一度行う巡礼がある。この際男性はイフラームと呼ばれる巡礼衣を着用する。イフラームは禁忌を順守しているという意味であり、メッカに到着した際にこれから禁忌の状態に入るという意味で衣服を着替えるために、巡礼衣もイフラームと呼ばれる。イフラームは縫い目のない白の2枚の布

で、これを上半身と下半身に巻く。白装束にすることにより誰もがアッラーの前で平等であることを示すとされている。そして、このイフラムは巡礼後、大切に保管され、死装束となる。

イスラーム圏においては、人は死後復活し永遠の生命が与えられるという考えから、葬儀は迅速かつ簡素である。遺体は湯かんされ、2~3枚の白い綿布で包まれ棺に収められる。この時に使用されるのがイフラムである。棺はコーランの文字が書かれた緑の布で覆われてモスクに運ばれ、立ったまま礼拝が執り行われる。その際、イマーム(宗教的指導者)が葬儀に集まった人に対して、死者が生前に不当な振る舞いがあったとしてもそれを水に流し、存命中の恩や借金を帳消しにすることが出来るかを問う。ここから、人間を皆平等な生まれた状態に戻して旅立たせるという考え方が窺える。つまり、死装束としての「白」も巡礼衣と同じように、すべての人が神の前で平等であるということを示す色であると推察される。

また、「コーラン」には天国の様子が詳細に記述されている。終末の時が訪れると、天使が時の終わりのラッパを吹き鳴らす。やがて地上では天変地異が起り、すべての人は復活する。そして、生前の行状に応じて審判がくだり、天国か地獄に振り分けられるのである。信仰のある者が死ぬと、天使がやってきて天国へ招くとされる。預言者伝承では「天国はきらきら光る光である。」「アッラーは天国を白色に創られた。白色がアッラーの一番好まれる色である。だから生きている間も、死んだ後も白の衣服で身を包むように」といった記述があり、天国は光輝く白色であることがわかる。また、光輝く白い真珠は天国の描写として多用される。「天国の住まいは真珠でできている」、預言者が天使に連れられて天国に入ると「そこには真珠でできたドームがある」などの記述、また神が地獄から黒焦げになった人々を引き出して、命の水に投げ込むと、彼らは生き返って「真珠のように輝く」など。つまり、天国は真珠のように白く光輝く場所というイメージとしてとらえられていることがわかる。

以上のことから、イスラームにおける「白」は、巡礼衣や死装束として身に付けることによりアッラーの前では誰もが平等であることを示すものであり、それはまた信者の一番の関心事である復活後の永遠の世界である天国をも象徴するものであるということが出来るであろう。

(5) フランスを中心としたヨーロッパ

17、18世紀フランスの葬礼におけるエチケットが複雑さを極めたことは、すでに知られている。この複雑な喪服のエチケットは革命を迎えるまで続き、革命後いったんは消滅するものの、ナポレオンがフランス王家の喪服規定を復活したため、後の時代にも影響を与えたものとなった。

Annonce des deuils という通称で知られる1766年に発行された喪服に関する年鑑によると、葬礼の服装規定の第一は服喪期間の制定である。最も長期に亘るのは夫に対する寡婦の服喪期間で1年、王に対する服喪および宮廷での大服喪は6カ月というように死者との関係によって、服喪期間は定められた。また、服喪期間は大喪服(*grand deuil*)と小喪服(*petit deuil*あるいは*demi deuil*)の期間にわかれる。大喪服は、父母、祖父母、夫、妻、兄弟姉妹という血縁者のみに適用される。大喪服および小喪服の時期は、喪服の素材や色によって区別された。具体的には、大喪服は①毛織物の時期②絹と黒石の時期③小喪服とダイヤモンドの時期の3期で、小喪服は①黒②白の2期に分かれていた。喪服の原則は、最も深い弔意を表すのが毛織物でありそして絹へ、またその色も、黒、白(白黒または灰)という順番でしだいに軽いものへと移った。喪服において、色は当然のことながら、それ以上に素材が何であるかも重視されていたことが窺える。色は、黒だけでなく、喪明けが近づくにつれて、白が加わるのが注目できる。

また、2005年4月8日に行われたローマ教皇ヨハネ・パウロ2世の葬儀には、赤や白が顕著に見受けられたが、現代カソリックにおける死の意味を探ると、カソリック教会において、死を表象するのに相応しい色は、本来白であることがみえてくる。キリスト教世界においては、古来、死は神のもとへ凱旋することであ

り死者は勝利者であった。さらに、カソリックにおける死は復活の信仰と結ぶものであり、「死」は来るべき復活にむけての一時的な眠りにすぎないとする考えが強かった。そこから、復活の希望を表す白い喪服や、白い死装束、あるいは婚礼衣裳を喪服にする事例などが見られるようになる。民俗学者アルノルト・ファン・ヘネップはこのことについて、死後、女性信者はキリストの花嫁になるからであるといっている。黒い喪服の登場は、中世後期の「煉獄思想」の影響によるという考え方もある。

現代カソリックでは、「葬儀は、キリスト信者の死の過越(すぎこし)の性格を明らかに表現し、典礼色も含めて、各地方の状況と伝統に、よりよく適応したものでなければならない」と言われ、葬儀の祭具、復活を信じた文言などには、白が顕著に表れていることもわかる。このように、カソリック教会において、葬儀の典礼色は白がもつともふさわしく、おそらく同様に喪服の色も白がふさわしいとされながらも、地方の慣習などを尊重する中で、白と黒が混在しているというのが現状なのではないだろうか。

2. 葬礼における白の意味と文化比較

日本においては、古くより葬礼における色は白が基本であり、平安時代に宮中を中心とした貴族層に黒の喪服が用いられ、この文化が近代まで宮中の伝統的な葬儀には継承されてきた。しかし、庶民層を中心とした人々の意識の中には、古代からの葬礼と関わる色は白との概念が底流し続け、近世から近代へと白が正式とする風習は連綿と受け継がれてきた。古代日本人は白を神霊なものの色とし、神祀りの基本的な色は白であった。古代において人は死ぬと神になると考えられており、死者に対する祀りと神祀りは同根のものであり、この意味で葬礼と関わる色が白というのは当然のことであった。

一方、日本文化と深い関わりのある中国も、古代から葬礼の色は死装束も喪服も基本的に白である。五服の制により、重い喪に服す際の喪服の衣裳は生成りとなっているが、これは粗末さの表現の為であって基本的には白がその基調色となっている。このことは現代まで連綿と継承されており、葬式は「白事」と言われるように白との関わりは深い。中国における白色は、物事の終末を送るのに相応しい色であるとされている。白は五正色の一つであり、西や秋を象徴する色であることから、太陽の沈む方角、そして草木の季節の終わりということと関わって終末を送るのに相応しい色としている可能性はある。また一方で、白色は色(物)の根源であるとしており、人も死ぬと白に帰る(白はシャレコウベ)のであり、終末を送る装束も白なのである。

インドのヒンドゥー教においては、葬礼は新たな誕生への出発点であり、死者は白布に覆われて茶毘に付され、儀礼に際しても喪主や親族は白を基調とした衣裳を纏うことが多い。また未亡人は、寡婦であることを示すために白いサリーを着続ける。ヒンドゥー教においても白は浄性や清潔さを意味しており、死者や親族や寡婦が白を装うのはこの意味においてであろう。

イスラームにおいては、重要な巡礼の際にイフラームと称される白の 2 枚の布を下半身と上半身に巻くのであるが、このイフラームは死装束になる。預言者伝承には、天国は白色で、白はアッラーの一番好む色であり、生きている者も死んだ後の者も白い衣服で身を包むようにと記されている。信者であった死者の復活後の永遠の世界である天国は光輝く白色の世界であり、死者はアッラーの最も好む色である白を装って白の世界に行くのである。

フランスで 17 世紀に定められた喪服規定によると、喪の軽重は色よりも素材でなされているが、いずれにしても黒がその基調色であることには変わりがない。しかし、カソリックにおいては、死は復活に向けての一時的な眠りに過ぎないと考えられており、復活の希望を表す白の死装束を装う事例がみられる。時には花嫁衣裳を死者に装わせることもあるが、これは死後、女性信者はキリストの花嫁になるからとの解釈も

なされている。

以上のことから、いずれの地域においても白が葬礼と関わる色であることには違いが無いが、それぞれの国や宗教によりその意味は異なる。しかし、その文化の関わり方からして当然といえるのであるが、イスラームとカソリックの白の意味には共通性がみられる。また、日本の白を神霊な色とする根源には天の光が関わっている可能性が大きく、実は中国でも白には明るい光の意味もあり、その意味では日本も中国もイスラームと通じるものがあるのである。

主な参考文献

- 増田美子『日本喪服史—古代篇—』源流社 2002、増田美子編『日本衣服史』吉川弘文館 2010、風見明『明治新政府の喪服改革』雄山閣 2008、村上興匡「大正期東京における葬送儀礼の変化と近代化」『宗教研究』64(1)日本宗教学会 1990、此経啓助『明治人のお葬式』現代書館 2001●谷田孝之『中国古代の喪服の基礎的研究』風間書房 1970、西岡弘『中国古代の葬禮と文学』汲古書院 2002、齊濤主編石変竜著『中国民俗通志』山東教育出版社 2005、白川静『回思九十年』平凡社 2000、竹内照夫『礼記』新釈漢文大系 明治書院 1983、●井狩弥介「ヒンドゥ葬送儀礼における象徴の諸相」『人文学報』第 60 号 1986、橋本泰元「ヒンドゥー教における葬儀と靈魂観(上)—最期の供犠」田中純男編『死後の世界—インド・中国・日本の冥界信仰』東洋書林 2000、J.P. Parry, *Death in Banaras*, Cambridge University Press, 1994、E. Schömbucher & C. P. Zoller (eds.) *Ways of Dying: Death and its Meanings in South Asia*, Manohar, 1999●井筒俊彦訳『コーラン』岩波文庫 2004、牧野信也訳『ハディース』中公文庫 2001、イブン・カイイム・アルジャウズィーヤ著水谷周訳『イスラームの天国』国書刊行会 2010、J.I.Smith and Y.Y.Haddad, *The Islamic Understanding of Death and Resurrection*, Oxford University Press, 2002●Alfred Franklin, *La vie privée d'autrefois, art et métiers, modes, mœurs, usages des Parisiens du XIIIe au XVIIIe siècle, <Les magasins nouveautés, * * * >*, Paris, Plon, 1896、Lou TAYLOR, *Mourning Dress, a costume and social history*, 1983、*Ordre chronologique des Deuils de Cour, qui contient un précis de la vie et des ouvrages des Auteurs qui sont morts dans le cours de l'année 1765, suivi d'une Observation sur les Deuils*. Paris, De l'Imprimerie de Moreau, 1766、Arnold van Gennep, *Manuel de folklore français contemporain tome1, 2. mariage, funérailles*, 1980 ; カトリック中央協議会編『カトリック儀式書、葬儀』1993